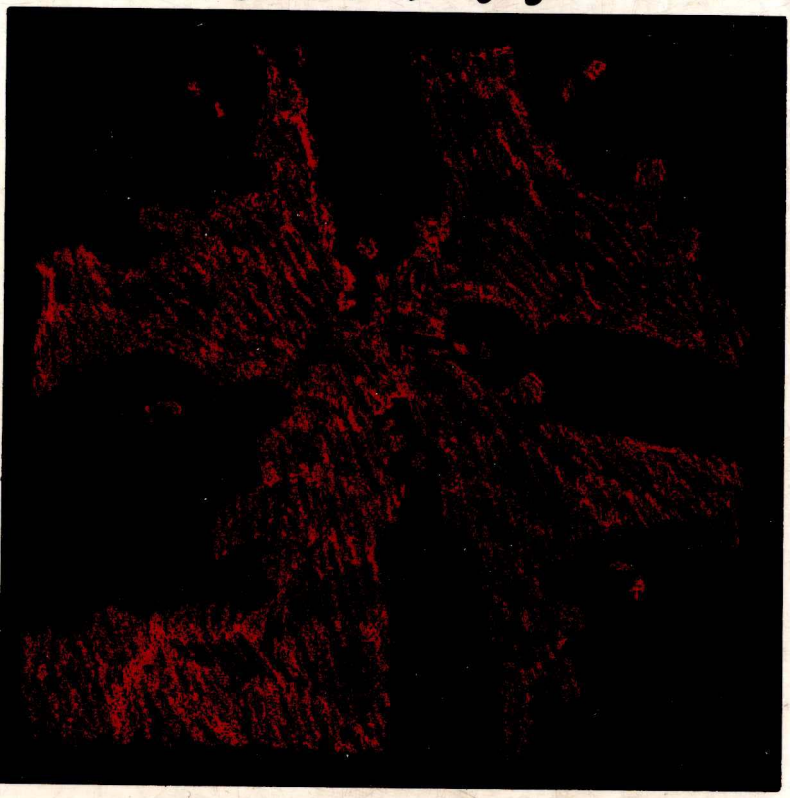
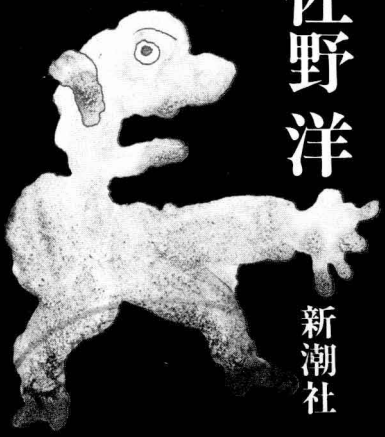
佐野洋



新潮社

推理小説実習



佐野洋

新潮社

推理小説実習■目次

第一話　鍵の旅〈犯人当て〉　7
第二話　絶つ〈倒叙〉　43
第三話　黙秘権〈アリバイ崩し〉　81

第四話　頼もしい男〈心理サスペンス〉　119
第五話　バスはどこに〈事件小説〉　157
第六話　赤い煙草〈楽しい犯罪〉　195

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

装幀とイラスト／辰巳四郎

推理小説実習

第一話

鍵の旅

〈犯人当て〉

「探偵小説が現代文学の中に占めている、そうした独自の地位を理解するためには、まずその独特の魅力が何であるかを見きわめる努力からはじめる必要がある。この魅力なるものが、他の種類の娯楽小説とは根本的に無縁のものだからである」

と、ウィラード・ハンティントン・ライトは、選集『傑作探偵小説』の序論で書いている。

「では、探偵小説があらゆる階層の人々の心——他の娯楽小説などはかえりみようともしない人人の心を、とらえてはなさないというのは、いったい何のせいであろうか。高い教養を身につけた人々が——大学教授、政治家、科学者、哲学者、そのほか人生のより重大な、より高度な、より頭脳的な問題にかかわりをもつさまざまな人々が——なぜ他の種類のベストセラー小説の前を素通りしながら、気晴らしやくつろぎを求めて探偵小説を読もうとするのだろうか。

私の考えでは、その答はただ一つ、こうである。すなわち、探偵小説はふつうの意味での『小説』の項目に当てはまるものではなく、むしろ『なぞなぞ』の範疇に属するものである。つまりパズル、小説の形をした、複雑化し拡大されたパズルなのである。その広汎な人気とおもしろみは、根本的には、クロスワード・パズルに人気とおもしろみをもたらすものと同じ要因から来るものである。実際、クロスワード・パズルの構造とメカニズムは、探偵小説のそれと非常によく

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

似ている。どちらにも、まず解くべき問題があり、その解決は全面的に頭脳の作用――すなわち分析したり、一見無関係な各部分を組み合わせたり、各要素をよく認識したり、またある程度、当てずっぽうに推測したりすること――に依存する。また、どちらにも、解き手の手引きになるような一連の錯綜した手がかりが与えてあって、その手がかりはうまく正しい場所に当てはめれば、その先の進行の道しるべとなってくれる。どちらの場合も、最後の一点まで解決してみると、すべての細部がたくみに織りこまれて、互いに関連し、綿密にからみ合った一枚の完全な布地になっていることがわかるのである」(田中純蔵氏訳『傑作探偵小説』=鈴木幸夫氏訳編『推理小説の詩学』所載)

このウィラード・ハンティントン・ライトというのは、実は『ベンスン殺人事件』『グリーン家殺人事件』などの著者であるヴァン・ダインの本名であり、この『傑作探偵小説』が出版されたのは、一九二七年であった。

つまり、これが書かれてから、すでに半世紀が経っており、言葉の本来の意味において、古い探偵小説論と言えるだろう。現に、前記『推理小説の詩学』には、「ライトのおおいに独断的な所論の多くは――探偵小説のすべての〝様式〟に対する反対論はまさしく極端な例であるが――時の経つにつれて、妥当ではなくなってきている」という解説がついている。

だが、それにもかかわらず、推理小説にパズル的要素があるのは、一つの事実であろう。いや、少なくとも、そのような読み方をする読者がいることだけは、誰もが認めることと思う。それだからこそ、推理小説の批評において、結末、ことに犯人を明かすことが、タブーとされているのである。

そうした事情を考え、『推理小説実習』の第一話では、最もパズル性に徹した形式『犯人当て』

を試みることにしたい。

ところで、このパズルという形式は、それが読者と作者との間のゲームであるため、いろいろな作家、評論家などによって、ルールが作られた。中でもヴァン・ダインの二十則、ロナルド・ノックスの十則などが有名である。

「これらの付帯意見は……」

と、ハワード・ヘイクラフトは書いている（林峻一郎氏訳『探偵小説・成長と時代』）。「みな研究者や作家志望者の注意をひくにたるものである。だが、福音書十戒のように、それらはふたつの主要な要求にわけられるだろう。(1)探偵小説はフェア・プレイでなければならない。(2)探偵小説は読んでたのしいものでなければならない」

この『フェア・プレイ』については、とくに説明する必要もないと思うが、実作家の立場から言うと、ドロシー・セイアズの次の言葉に最も共感できる。

「このタイプの探偵小説の作家がねらうのは、読者に結末のところで、『なんだい、これならはじめから知っていたさ』とか、『チェッ、こんなことを言いあてろなんて無理じゃないか』とか言わせることではなくて、『なるほど、そうか、こいつがわからなかったとはぼくも馬鹿だったな。ずっと目と鼻の先にあったのに』と言わせることなのである。これこそ貴重な讃辞である。これを求めてなんと多くの作家が奮闘することか。そしてこの讃辞を得るものはまれにしかいないのである」（H・ヘイクラフト編、鈴木幸夫氏訳編『推理小説の美学』より引用、この項の訳者は田中純蔵氏）

一方、ヘイクラフトの要約したルールの(2)「読んでたのしいもの」ということになると、現在では、さらに難かしくなって来ている。

探偵小説を面白くさせる要素の一つに、『犯人の意外性』ということがある。しかし、これに

ついても、ドロシー・セイアズは言っている。

「初期の推理小説では、問題はたいてい誰がその罪を犯したか、という点にあった。はじめ、まだ読者がすれていなかったころは、『最も意外な人物』という公式は大いに流行した。だが読者は、まもなくそれを見破るようになった。もし物語の中に、一見その犯罪になんの動機ももたないように見え、ほとんど最後の章近くまで何の容疑もうけずに大手をふって歩きまわる人物がいたら、男女を問わずその人物は要注意なのである」(同前)

ドロシー・セイアズが、こう書いたのは、一九二八年であるが、これは五十年後の日本の読者にも、当然言い得ることであろう。

とすると、私は、どんな手を使ったらよいのか！　小説を書く前から、少々自信をなくしている。

しかも、ヘイクラフトは「独創的で納得できることが確かでないかぎり『トリック』の殺人方策をつかってはならない。×××とか、×××、その他似たような、十年もまえに人気があった『ペテン』は、いまでは昔のフロレンス製ペーパー・カッターと同じように古くさいものである」(『探偵小説・成長と時代』)と言っているが、この小説には、その『×××』が使われているのだから……。(×××は、むろん、原文には、はっきりと書かれている。しかし、それを明記しては、小説の筋が割れてしまうので、ここでは伏字にさせていただく)

＊　＊　＊

N県警では、不定期的にではあるが、『捜査検討』という印刷物を刊行している。これは、管

内の警察官を対象にした研修資料で、むろん非売品である。
その一九七×年第三号に『特異な殺人事件の研究』として取り上げられているのが、この事件であった。
この資料では、こうした文書の常として、冒頭に被疑者の住所氏名が明記されており、従って、資料をそのまま載せたのでは、『犯人当て』という目的に合致しないので、後半部の『事件の問題点』というあたりから、紹介しよう。

『三、事件の問題点

前述の如く、本事件には、次のような点に特徴が見られた。
(1)犯人は、現場即ち該別荘の宿泊者の中にいると思われたこと
(2)しかし、宿泊者たちの当初の供述を検討すると何人も犯行が不可能と思われたこと
従って、捜査の重点は、関係者の供述を洗い直し、矛盾点を突くことに向けられた』

『捜査検討』には、このように書かれているが、それを詳しく説明すると——
別荘というのは、修南学園大学文学部教授利根圭一のものであった。
もともと、そのあたりは、地元柏井町の町有別荘地で、短大を含めた各大学の教師、または付属研究機関の研究員に限って、安い賃貸料で土地を貸し、別荘を建てさせたのだった。
地元では『学者村』と呼ばれ、郵便物なども『柏井町学者村×号』で、ちゃんと届くということである。
このような形の別荘地は、全国的にも幾つかあるが、ここが、ほかの『学者村』と違っている

のは、温泉が出るということだった。
もっとも、その温泉は、町が別荘地の借り手を募集したときには、発見されていなかったのだが、その後、偶然のことから湯脈が見つかったのだという。そして、土地の借り主たちは、いくらかの権利金を、別に町に払うことにより、温泉を利用することができるようになった……。
事件が起きたのは、九月八日であった。
利根圭一は、四十四歳、東京田無市の自宅には、妻と二人の男の子がいた。
「八月末までは、家族も別荘に来ていたのですが、こどもが二人とも中学生で、九月から新学期が始まるので、私だけが、ここに残りました。私の場合、大学で講義が始まるのは九月十六日からなので、それまではここに残って翻訳の仕事をすることにしていたのです」
利根は、家族と離れて別荘暮しをしている理由を、警察官に対して、このように説明した。
殺人事件の被害者は、彼の母方の従弟にあたる河田良作であった。
この河田は、三十九歳、独身である。彼の職業について、『捜査検討』には、無職と書かれている。利根は会社員と述べたのだが、捜査当局が、その会社に問い合わせたところ、すでに数か月前に、そこを退職していたのだった。
事件の通報が、柏井署にあったのは、八日の午前七時十二分であった。利根が別荘地内の内線電話で、管理事務所の交換台を呼び出し、そこで警察につないでもらったのである。
別荘地内でも、一般加入電話を持っている家は何軒かあったが、利根のところは、まだそれをひいておらず、外部との連絡は、このように、管理事務所の交換を通して行なっていたのである。
この朝、利根の別荘には、河田のほかに、四人の宿泊者がいた。すべてが、二十代後半から三十代前半の女性であった。

地元新聞の記者たちの話では、彼らは、この話を聞いたとき、色めきたったらしい。(この資料を入手した私は、N県に出かけ、警察官や新聞記者に話を聞いているのである)

中年の男二人と、女ざかりの女性四人が、同じ屋根の下に泊ったと知って、そこに性的な状況を想像したのであろう。

「学者村の乱交パーティ、しかもその結果の殺人事件となれば、大ニュースですからね」

と、記者の一人は、笑いながら言った。

ところが、事実は、そういうことではなかった。もっと、深刻な問題で、四人の女性はここに集まって来たのである。

四人の姓名、年齢、職業は——

▽村井利子(三二)高校教師

▽山形勝代(三〇)外資会社勤務

▽春名美知(二七)喫茶店経営

▽峠サヨ子(二七)旅行社勤務

そして、四人とも、修南学園大文学部の卒業生であった。

「河田は……」

と、春名美知は、係官に供述している。呼び捨ての形になっているのは、調書をとった警察官が、敬称を省略したのではなく、彼女自身が呼び捨てにしたためであろう。その証拠に、彼女は、利根に対しては、ちゃんと『利根先生』という表現を使っているのだから……。そして、河田と

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook